

明清時代の商人集団と商人会館

范 金 民

- 1 「商幫 (shangbang 商人グループ)」の結成
- 2 「商幫」意義
- 3 商人会館
- 4 おわりに

明代中期に商品経済が発展し、商品の流通が活発になり、商人が活躍するにつれて、各地で大小の商人集団、いわゆる「商幫」が結成されるようになったが、一般的には地域名に「商」をつけて、某商と称するのが当時の慣いであった。有名なものとしては、徽商、晋商、閩（福建）商、粵（広東）商、江右（江西）商、陝西商、山東商、龍遊商、寧波商、紹興商、洞庭商、句容商などがある。こうして、中国社会における商人の無組織状態は終わりを告げ、商人は集団的な力を発揮し始めた。

1 「商幫 (shangbang 商人グループ)」の結成

明代中期から、全国各地で続々と地域商幫が結成された。その原因、前提は一体どこにあるかについて、従来の研究は地域性を強調するものが多く、全国と各地域の両方を視野に入れて追求する姿勢において、物足りない。

全国的な背景という要素に加えて各地の個別状況という要素が絡んで、各地の商幫が特定の

時代に形成されたはずなのである。では、全国的な状況変化がどのように商幫の結成を促したのか。

- ① 明代中後期には交通条件が改善され、大規模かつ遠距離の商品運送が便利になって、各地に商幫の出現を促進した。全国各地の水上、陸上交通が著しく発展したのである。隆慶4年（1570）に安徽商人黄汴が完成した『天下水陸路程』によると、当時全国で水陸路程が143本に達し、その中で、南京から全国各地行きの幹線道路、水路が11本、8方向の路線を完成し、四通八達の商道ネットを構築した。しかも、さらに新たに道路、水路を増設した。例えば、南京－北京間には道路が3本、南京－北京－江西・南昌間には4本、南京－四川・成都間に4本、南京－山東・済南間に3本が付け加えられた⁽¹⁾。これらの幹線における商品流通は非常に頻繁であった。南北大運河について、嘉靖、隆慶時李鼎は「燕趙、秦晋、齊梁、江淮の品物が昼夜の運送によって南に到着、甌海、閩広、豫章、南楚、瓠越、新安の品物が昼夜の運送によって北に到着……船は続々と流れて、絶えることがない。」と述べている⁽²⁾。華中から江西を通り大庾嶺を越えて広東行きの幹線につい

(1) 韓大成『明代城市研究』、中国人民大学出版社、1991年、第244ページ。

(2) 李鼎『李長卿集』卷一九「借筑篇・永利第六」。万曆四十年豫章李氏刻本。

ては、正徳時の張弼が「北から南に運送される品物はほとんど金帛などの軽くて精緻なもので、南から北に運送されたのはほとんど塩や鉄などの重くて荒物の類である。」⁽³⁾と述べている。福建・江南間については、嘉靖、万暦時太倉人王世懋が商品流通の盛況を次のように描いている。

凡福之綢絲、漳之紗絹、泉之藍、福、延之鉄、福、漳之橘、福、興之荔枝、泉、漳之糖、順昌之紙、無日不走分水嶺及蒲城之小関、下呉越如流水。其航大海而去者、尤不可計⁽⁴⁾。

道路網が発展し、商品流通が日に日に繁栄するにつれて、商人は集団で巨額の資金を集中して経営活動を行うことによって、規模効果の恩恵を被り、実力を養うようになった。交通条件の改善、大規模の商品流通が商人達の集団化を促したと言ってよからう。

② 商品生産の発展と、その生産構造とが商賈の結成に有利であった。

明代の商品生産でもっとも注目すべきは布と絲綢である。

宋の時代に既に閩広と陝西で棉を植え始めていた。元の時代に入ると、棉の栽培技術が次第に南から北へと伝播し、元の中後期には既に全国範囲で植えられるようになっていた。明の時代に「棉の種は天下に広がって、南の土地も北の土地も棉に適し、貧乏人も金持ちも棉に頼り、その利益は絲綢の百倍にも達している」⁽⁵⁾。「天下に広がる」とは実際には主に河南、山東、

湖広と江南の松江、太倉、嘉定と常熟などのことである。ここで注意すべきは、当時は江南以外の地域では、棉の栽培と布の生産にはほとんど関与していなかったことである。江南は全国一の布生産地域で、毎年全国各地に何千匹の布を提供していた。販売範囲から言えば、松江布が全国一で、華北、北西、北東、華中と華南といったように広い範囲に達していた。万暦時の商人は次のように言っていた。「布と言え、本物の松江布なら、全国いたるところで通用する。」⁽¹⁾。ところが、地域内の調節や福建省等の地方への輸出などのせいもあって、江南は毎年華北から棉を輸入していた。さらには、湖広から輸入した例もあった。一方、山東、河南等の植棉区では織布技術が発展していなかったため、毎年江南から多量に布を輸入することを余儀なくされていた。万暦中期河南巡撫の鐘化民の上奏文には次のように記されている。「臣の見たところでは、中州の土が非常に肥えて、半分ぐらい棉を植えている。その棉はほとんど商用されており、民間の服も購買して得るのがほとんどである」⁽⁷⁾。そこで「北土広樹芸而味于織、南土精織紉而寡于芸」といわれているように、北は植えることには熟練しているが、織るのは未熟であり、南はその逆であるという現象が起きていた。全国の棉の生産と布の生産が一致してないので、「棉は北から船で南に運送され、棉布は南から船で北に運送される」という状況になっていた。こうした棉と棉布の流通状況は、徽州商人、洞庭商人、山陝商人、福

(3) 張弼『張東海集』文集二「梅嶺均利記」。『四庫全書存目叢書』本。

(4) 王世懋『閩部疏』。『叢書集成初編』本。

(5) 邱濬『大学衍義補』卷二「治平天下之要・制国用・貢賦之常」。『四庫全書』本。

(6) 余象斗『三台万用正宗』卷二「商旅門」。万暦三十七年刻本。

(7) 鐘忠惠公賑豫紀略、『荒政叢書』卷五「救荒図説」。

建商人及び広東商人などが綿と棉布を大規模かつ遠距離にわたって販売する可能性を提供した。

明時代の絲綢生産は江南地方、川中（四川盆地）、山西・潞安、福建・泉州と漳州、広東・広州などの数少ない地域に限られている。特に江南の杭州、嘉興、湖州と蘇州の一部の県が最も繁栄しており、その様子を清初の唐甄が「北は淞まで、南は浙まで、西は湖まで、東は海まで、すべて合わせても周囲が千里しかない」と描いているように、ごく狭い地域であった⁽⁸⁾。そして実際に輸出が可能なのは江南と川中だけであった。徽商、洞庭商人、山陝商人、福建商人及び広東商人が遠距離にわたって生糸と絲綢の販売をさかんに行った。万暦時代の張瀚は、「秦、晋、燕、周の大商人が絲綢を求めるなら、ぜったいに浙江の東に行かねばならぬ」と述べているが、その状況は清時代に入っても変わりがなかった⁽⁹⁾。

- ③ 銀の貨幣化は決済手段を改善し、決算効率を向上させ、大規模な商品流通に拍車をかけ、商幫集団の発生を促進した。

明初では各地の徴税は物納であった。官吏は南京で俸給を受け取るようになっていたが、朝廷の秩序が乱れており、実際には俸給を得られなくなっていた。正統元年（1436）、南畿、浙江、江西、湖広、福建、広東、広西では米と小麦を計400万石収めて、一石を銀2錢5分に換算して、計100万両の銀が内承運庫に入った。こうした銀は「金花銀」と呼ばれ、元々純度の高い銀のことでもあり、徴収地も限られていた。

けれども、徴税が実物から銀に変わったことが経済発展に適応して、商品流通に拍車をかけた。しかも、それが成化23年（1487）には既に全国に広まっていた。「既に天下に行われ」、「これをもって永遠に行く」という状況であった⁽¹⁰⁾。正統年間の金花銀の発生によって、銀を大規模流通貨幣として使用することが可能になった。嘉靖年間からは、各地で財政収支、丁糧徴収及び官府の徭役はすべて銀を基準とする「一条鞭法」が実施されるようになった。その方式が万暦九年には全国で通用するようになった。一条鞭法は人口と戸数の税を土地に換算するので、税収のうちで土地の比重が大きくなり、その一方で人口による税の負担を減らした。それ故に、「都市に便利で、農村に不便である」と言われ、経済が発展し商品流通が速い地方であれば有利である。しかも、すべて銀で徴収するので、徴収手続きが簡単になった。従って銀の貨幣経済を推進して、商品生産と商品経営活動の展開に有利であった。

塩税徴収に関して言えば、明代には塩の販売は「開中法」で行なわれていた。まずは塩商が中央に報告して、指定された倉庫に食糧を納めて、塩引（塩の販売許可）をもらう。しかし、弘治5年（1492）には、商人が苦しんでいたために、戸部尚書葉淇が運司で銀を収めるように規定した。塩ごとに34錢で、太倉銀庫に貯蔵して、各地方に運ばれる⁽¹¹⁾。従来と比べて値段は倍になったけれども、食糧と塩を運ぶという長年の苦しみを商人に免除したばかりか、太倉銀も百余万両ほど溜まるようになった。

(8) 唐甄『潜書』下篇下「教蠶」。中華書局、1955年本。

(9) 張瀚『松窗夢語』卷四「商賈紀」。上海古籍出版社、1986年本。

(10) 『明史』卷七八「食貨二」。中華書局、1974年本。

(11) 『明史』卷八〇「食貨四」。王瓊『王瓊集・雙溪雜記』（山西人民出版社、1991年）を参照。

塩商を主体とする徽商はこうした徴収体制の変化につれて迅速に発展した⁽¹²⁾。

工匠服役に関して言えば、成化21年(1485)には、労役の代わりに銀を出すことが許されるようになった。南の匠の場合は一人につき毎月銀9銭を、北の匠は銀6銭を出せば、役を免れるようになった。弘治18年(1505)には、更に南北問わず每班1両8銭徴収するようになった。嘉靖41年(1562)には、四年を一班として、班毎に銀1両8銭を徴収し、四年かけて、一人につき年に4銭5分を徴収した⁽¹³⁾。工匠は労役の代わりに銀を出すことで、商品労働の労力が増え、商品総量も増大した。

明中期に始まったこれらの改革は銀の貨幣化を著しく促進し、客観的に商品流通を推進した。それに加えて、商人達が集団になって、大規模な経営活動を展開するに必要な前提条件をつくり上げた。民間で銀の貨幣化が進行する時代こそは各地域の商幫が結成される時代であった。

- ④ 明の商業税率は比較的に軽く、経営コストを軽減し、商人の実力養成に有利で、商人集団の発生の条件を整えた。

明の商業税は「三十分の一を越えてはならない」とされ⁽¹⁴⁾、宋、元の時代より軽くなった。明の中期には、紙幣法はまだ整備が行き届かなくて、紙幣価値は法定価値よりだいぶ劣っているのに、地方徴税の際にはいまだ「昔のまま徴収」されていた。そのうえ、紙幣は完全に流通するに至っておらず、地方徴税の際には紙幣を銀に換算

するのだが、実際に収められる税額は「原価の十分の一にも足りない」ほどで、商業を営む人の負担は随分軽減された。明の税制改革は続々と負担を田畑に移し、商業税を田畑に移して、実際の税率を大いに軽減した。商業税を部分的に田畑に移すことにより、一条鞭法が全面的に実施されるようにして、更には畝と人口だけを基準とするようになった。商業税が相対的に軽くなって、多くの農民が商業活動を営むようになり、商人集団の結成をも促すことになった。

明の後期には、各地域で商人、特に行商人の負担を減らす税政を実施した。嘉靖4年(1525)、巡撫御史朱実昌の上奏によって、蘇州、松江、常州、鎮江など江南の商品経済が相対的に発展していた地域では、改めて門攤税を作った。すなわち、従来、各税課司局が徴収していた客貨店舗門攤税などを門攤税に統一して、都市の各業種が自分で徴収し、商貨税を徴収しなくて済むようになった⁽¹⁵⁾。これで、都市の各業種が貧富の程度に応じた等級を定めて税額が決められ、わりと合理的で、適用しやすいから、商人たちは喜んでこれを受け入れた。更に重要なのは、この税制が商品税を徴収しないことであつた。これは行商に特に有利で、商品流通を促進した。こうして、各地域で商幫が結成され、実力も増大し、その活発ぶりは江南一帯で最も際だっていた。

- ⑤ 明代中後期の社会意識も商幫の結成に有利だった。

商品経済が発展し、商品流通が発達する

(12) 拙稿『明代徽州塩商盛於兩淮の時間與原因』(『安徽史学』2004年第3期)を参照。

(13) 萬曆『明会典』卷一八九「工匠二」。台湾新文豐出版公司、1976年刊行本。

(14) 萬曆『明会典』卷三五「課程四・商税」。

(15) 嘉靖年間の門攤税改革について、一部の研究者が

『天下水陸路程』、『士商要覧』、『商程一覽』等書中に記されている「嘉靖七年奏定門攤貨不税」を根拠に、改革によって門攤税が廃止されたと主張するが、実際は門攤税の改定により客貨税が免除されたとのことであつた。その詳細は拙稿「明代嘉靖年間江南的門攤税問題——關於一条材料的標点理解」『中国経

につれて、社会各階層の商人に対する意識も変わるようになった。成化、弘治時に経世政策を重視した大学士丘濬は次のように述べている。

今天下之人不為商寡矣。士之讀書將以商祿、農之力作將以商食、而工而耒而積氏而老子之徒、孰非商乎！吾見天下之人、不商其身、而商其志者、比比而然⁽¹⁶⁾。

今や天下では商業を営まない人間は少ない。読書する士も商人から俸給をもらい、農民が作った食糧も商品になる。社会各階層の行為を商人に例えて、身をもって商業しなくても、頭が商業していると言う。これは、商業が既に一般的な風習になって、商人の社会的地位が低くないということを示している。社会全員の行為が商人と同じであるということは、つまり商人の経営活動が公明正大であることを裏付けている。嘉靖時の古文名家崑山人歸有光は「昔には四種の民があり、四種の職業があった。ところが今や、士が農や商と混じるようになった」と述べている⁽¹⁷⁾。その後の文史名家太倉人王世貞もまた、洞庭商人翁参が義を持って商行為を行っていることを大いに称えている。文壇リーダーの口を通して、当時の社会が商人を肯定していた様子が垣間見える。

以上は全国的な背景であったが、以下では、各地域の状況を見たい。そこにも商幫の結成に有利な条件があった。

明代各商幫の誕生地はほとんど、人口が多くて土地が少なくところ、あるいは土地が痩せていたり自然条件が厳しいところである。商業を営むようになったのは、そうした地域の人々のやむをえない選択であった。明代官界には、「運

命が悪いなら、三西のポストを得る」⁽¹⁸⁾という諺があったそうである。即ち、山西、江西、陝西のように自然条件が劣悪なところに就任すれば利益が少ない、と。その「三西」こそが有名な商幫が結成されたところだった。自然や地理条件が相対的に悪いということが逆に商幫の結成の契機になったのである。その一方で、各商幫の誕生地にはたいいてい独特の農産物や商品があって、土地の人はその産品や商品を販売することによって、貧乏から抜け出し、豊かな生活が可能になった。

明政府の対外経済貿易政策によって、多くの商幫誕生地は有利な地理条件を与えられた。明代では萬曆46年（1618）以前に、「開中法」が実施され、山西、陝西商人に有利であった。その後、茶葉で馬を換える茶馬貿易が西北地方で行われることになり、これまた山西や陝西の商人に利をもたらした。明政府は当初は禁海していたが、隆慶元年（1567）以来、海を部分的に開放したのだが、これは沿海の浙江や福建や広東の商人に有利な条件となった。

商幫が結成されるかどうかには、当地の人の商業や商人に対する態度にも深く関わっている。同じ自然地理条件を持ち、同じく人が多くて土地が少なくても、そうしたどの地域でも同じく商幫が結成されるとは限らない。各地域の風習や観念が大いに関係していた。地方文献や関連情報を考察してみれば、ほとんどの商幫誕生地では、商業や商人に肯定的、あるいは称揚する態度を持っていたことが分かる。

まずは徽州人を見よう。嘉靖萬曆時代の徽州人である汪道昆は著書「太函集」で、同郷人の商と儒に対する観念について幾度なく触れている。例えば「儒を抑えて、商を唱えて、六籍を九章で換える」とか、「昔は儒を唱えて、商を抑

済史研究』2002年第1期を参照されたい。

(16) 邱濬『重編瓊台稿』巻一〇、「江湖勝游詩序」。

(17) 歸有光『震川先生集』巻一三「白庵程翁八十寿

序」。『四部叢刊』本。

(18) 謝肇淛『五雜俎』巻四「地部二」、第74ページ。

えていたが、我が故郷では商を唱えて、儒を抑える」とか。歙県では「人は農を抑えて、儒を唱える」けれども、「我が故郷では儒を抑え商を唱えて、高い利益を好んで名望を気にかけない」。新安では、「風習では儒をしないなら、商を営む。もし代々商を行うなら、良い商になって、儒に負けはしない。」というわけである。その著書では、商人の口を借りて、商業を営むことは儒することに等しいと述べている。例えば、「儒は名望を狙い、商は高利を狙う。」とある⁽¹⁹⁾。徽商は自らを次のように評する。「士と商は違う術を持っているけれども、志は同じである。」萬曆時代の徽州人呉時行は自分の兄の商業活動を次のように評している。「一人前の男が自分の志が実現できるなら、儒になる必要はない」⁽²⁰⁾。徽州人にとって、商業と農業は等しい。生きるために、儲けるために、子孫が官途で出世するために、商業を行うことは儒を行うことと等しい。商業を行うことは恥ずかしいことではない。儒をすることと商業を行うことは同時にできる。お互いに利用できて、お互いの利益が保障できて、お互いに交換もできる。こうした観念は、江浙の読書人が詩や経で家族を経営するやり方とは明らかに違っている。清初の小説には、「徽州で、人は16才になったら、商売を勉強するために家を出る風習がある」⁽²¹⁾と記されている。一定の年になったら、家を出て、商売を勉強するのは正当で当然のことなのである。これは既に風習になっている。その上、家を出て商売を勉強するのは賢い子で、家にいて儒をするのは不器用な子である、といった雰囲気、あるいは環境の影響によって、家を出て商売を勉強することが風習になっ

ており、あげくは、幫になるのも当然至極のことであった。

続いて、洞庭人について見よう。明天啓時蘇州人の文震孟は次のように言っていた。洞庭東西山人は「打算が上手で、詩経を勉強する術が弱く」、「程卓を重視して、鄒魯を抑える」⁽²²⁾。清初の当地の人呉一蜚は洞庭人のことを次のように評していた。「商業を根本にして、読書を末節にする。」明中期以降、洞庭商人が有名になる一方で、官途に入った人はほとんどいなかった。彼らの意識では、読書は必ずしも出世とはいえず、商売を営み事業を拡大することが出世の一つである。

続いて山西人を見てみよう。清雍正二年(1724)に、山西巡撫劉於義は次のように上奏した。「山右の積年の習慣では名望よりも利益を重視する。子孫で優秀な者はたいがい貿易を営む。中ぐらい以下の者には読書させる」。雍正はそれに対して、「山右では、有能な者が商売を営み、次が農業を行い、その下が軍人になり、一番下に読書をさせる。朕はよく弁えている」⁽²³⁾と答えた。積年の習慣と言われているのだから、随分長年の風習だと推測できる。明時代には晋商と徽商とが名声を等しくするのだが、商売を重視する点においては晋商は徽商より甚だしいものがある。

陝西人もそうである。隆慶、萬曆時の郭正域は「秦地では商売を職業にしている人が多い。士であっても商売を行うことは恥ずかしいことではない」⁽²⁴⁾と述べている。張瀚は秦地には「昔から商人が多い」と述べている。司馬遷の「史記・貨殖列伝」でも、秦地では大商人が多いなどと記されているところから見れば、陝西で

(19) 『汪氏統宗譜』卷一一六「弘号南山行」。

(20) 呉時行『兩洲集』卷六「仲兄養兼傳」。『故宫珍本叢刊』本。

(21) 艾納居士『豆棚閑話』第三則。

(22) 文震孟「鄭氏重修譜序」、乾隆『重修東山鄭氏世

譜』。

(23) 『雍正朱批諭旨』第47冊、雍正二年五月九日劉於義奏。

(24) 郭正域『大司馬總督陝西三辺魏確庵學曾墓志銘』。

商幫が出来たのには、伝統的な風習に基礎がある。

前述の福建泉州安平人の文中での「金儲けが好き」とか「安平では商人を厭わない」といった評判から見れば、そこで商業はまともな仕事であったことが分かる。

紹興人も家を出て商業することを重視する。萬曆時の王士性⁽²⁵⁾は次のように述べている。「頭がいい人は都市で官吏になり、九卿から下層官吏まで、越人でない人は少ない。その下の人が商業を行う。」⁽²⁵⁾ 雍正初年、浙江巡撫李衛は次のように上奏している。「紹興人でちょっとした才能がある人なら、そのたいていが故郷に留まらず、外へ出た。故郷にいるのはほとんど技能を持ってない人である」⁽²⁶⁾。これは清初のことだが、明人によると、遠出する習慣は明代から既にあり、もしその話をもっと深く追求していくなら、ずっと以前にもそうした風習があったであろうと推測できる。

特定の時空、背景、特定の社会条件に、全国規模の社会経済の変遷という背景、さらには各地の個別的な状況がいまって、各地の商幫が結成されたのである。

以上をまとめてみよう。明代中後期には商品経済が発展し、商品の流通も発達し、各地における商人集団の結成を促した。明代中後期には交通条件が改善され、大規模かつ遠距離の商品運送が便利になると同時に、商人が集団を組み、集団経営の必要が生じてきた。明代中期の銀の貨幣化が、支払い手段を改善して、決算効率を高めて、商品の大規模流通に刺激を与えて、商幫の誕生に有利な客観条件をもたらした。明代の商業税率が相対的に軽く、商人の経営コストを軽減し、商人の実力を増大したことも商人集団の誕生に有利に作用した。商品経済

が発展し、商品流通が発達するにつれて、商品経済の力が目立ち、社会各階層の商人に対する意識も変わって、商人集団の誕生に拍車をかけた。これらの状況が商幫誕生の全国的規模での背景になった。

一方、各地の商品生産の特徴、各地の自然地理条件と産品構造、明政府の辺防辺貿と対外政策や各地の風習及び商業に対する態度などがいまって各地での商幫の結成に有利に作用した。具体的に言えば、明代中後期の商品生産の発展、特に蚕桑シルク、棉や布の生産が専門化、地域化したことが、徽州、山陝、洞庭、閩粵などの商人が広域にわたって布などの販売をする条件になった。多くの地域では、人が多くて土地が少なかったり、土が貧しくて農産品が足りないけれども、特色のある商品が多いので、生きるために地域商人集団を結成するようになった。政府が成化末に「開中法」を実施したことも山西、陝西商人に有利であった。弘治年間、国境地域で食糧を納めていた税制を、地域の官庁に銀で納める税制に変えたことは、徽州塩商に有利に作用した。北西辺地で茶葉を馬に換える茶馬貿易が広まったことが、山西、陝西の商人に有利に作用した。対外的に、禁海政策から部分的に開海政策を施したことは、沿海の浙江や福建及び広東商人に有利であった。各地の商業に対する観念や手法の違いも、商幫の有無に影響を及ぼした。明代中後期の各地の自然条件や商品生産の特徴や国家の経済と対外政策、さらには、人々の社会観念といった総合的な要素が商幫誕生に拍車をかけた。商幫の誕生は中国近代社会の形を変える具体的な標識になった。

2 「商幫」釈義

(25) 王士性『広志繹』巻四「江南諸省」。中華書局、1981年本。

(26) 『雍正朱批諭旨』巻一七四、浙江巡撫李衛雍正四年十二月初二日奏。『四庫全書』本。

「商幫」は明代中後期に形成されたが、「商幫」という言葉の出現はかなり遅くなる。その名称の起源を追求すると、唐宋時代の「綱」に遡る。唐時代から中国貨物運送業には「綱」というものがあつた。宋、元、明時代にわたって、官私を問わず、海外貿易には「綱」という組織形態が存在したのである。綱には、綱首、綱紀があり、指揮や貿易事務を管理する。明代嘉靖後期の海外貿易に「客綱」ができて、客商と綱との結合が各地域商人の組織形態なのである。萬曆後期の、各地の塩運業にまつわる「綱運法」は、一定地域の同姓同宗の商人たちが資金を出して、塩運の「巢本」を占め、綱を結んで一定地域の定額の塩の運送を引き受けることであつた。塩業では商と綱とを結びつけたことが、形と内容において「商幫」という名称の誕生の前提になった。清前期になると、福建塩運業は地域において商綱で塩の運送を引き受けるようになり、商綱が「商幫」と呼ばれるようになった。こうして、「商幫」という名前が正式に生まれたのである。しかしながら、当時の「商幫」は塩運送の方向や地域にごとに結成され、それ以降に各地の商人団体を「幫」と命名したのとは異なり、とりわけ、外地の商幫である「客幫」の意味は全く含まれていなかった。また、福建の他の職業では、まだ「綱」と「幫」とが分けられず、「綱」すなわち「幫」と広く認められていた。「商幫」という名称は清初期の塩運送業から出現したが、商業活動全般に普及してはいなかった。清末まで、文献や記録に「商幫」あるいは「某商幫」と記されるのはまだ少ない。一般的には「幫」あるいは「某幫」とだけ記されている。清代「商幫」について説明しているのは『清稗類抄』農商類「客幫」条だが、地域商人集団を初めて「商幫」と呼んだのは、日本の

駐華領事の報告書においてである。清末期に至って、中国語の文献にも「商幫」がようやく見られるようになった。

以上のように、「商幫」という名前の出現はかなり遅いけれども、経済活動において、地域商人による「幫」の形成の追求は清初期にまで遡る。地域における業種毎の「幫」という言い方は遅くとも乾隆年間にはある程度常用され、嘉、道年間には各地で地域と業種の「幫」という言い方が一般的になっていた。それ以降も、幫についての記録や陳述などが見られるようになった。清末期、民国初期には「商幫」という言い方も出てきた。「商幫」は記録や文献に多く見られる。「商幫」は清初期に各地で商会を設立する基礎になった。あるところでは、商幫の実力によって理事の人数を配分する。商幫は新しく設立された商会に属し、新しい歴史条件と新しい経済組織において大きな役割を果たすようになる。

3 商人会館

会館とは、石小川が編集し1911年に出版された『天津指南』によると、「わが国の習慣で、都会で同郷会館を設立して、同郷の誼を深める」ための施設である。但し、これは一般的な同郷会館であつて、商人会館については、清中期の納蘭常安が「各省の大商人が建設して、泊まる場所で、会館と名づけて、極めて壮麗である」⁽²⁷⁾と、また、当時の人、両江総督陶澍は「会館は都心に設立して、衆商人の公の場所である」⁽²⁸⁾と述べている。それ以降になると、「商務繁栄のところや商人達が集中する場所では大概、会館、公所などが林立している」⁽²⁹⁾という人も

(27) 納蘭常安『宦游筆記』卷一八「江南三」、台広書局影印本。

(28) 陶澍『陶雲汀奏疏』卷一八「查核上海会館並無四

貯私塩暨舟山地方産塩応歸浙江經理摺子」。

(29) 「旅常洪都木商創建公所碑記」、『常州市木材志 1800-1985』、第35ページ。油印本。

いた。これらの発言によれば、商人会館とは、商人が商業都市で設立した集会所であることが分かる。

会館の分布については、1966年台北学生書局が出版した何炳棣の『中国会館史論』では、前二回の海関十年報告が調査対象とした全国34の大小の貿易都市及び非正式貿易都市を基準として、各地の会館を列挙すると同時に、参考文献を各関連都市の後に注記している。これは明清の商人会館に関する初めての著作であり、大きな価値を持っているということもあって学者達によく引用される。

しかし、筆者の考えでは、民国初年の日本東亜同文会による中国海関報告書と、日本駐華各地領事館の調査によって編集された『支那省別全志』のほうを対象の会館の地域範囲が広く、数量も多いうえに、『中国会館史論』には漏れている事柄が多い。例えば、湖南湘潭県会館については光緒年間の『湘潭県志』の建設図を基にして、万寿宮など5個所を列挙しているが、実は同書巻七『祀典・群祀表』には会館類の建設が30ヶ所と書いているのに、それについては全然言及していないのである。言及は少なく、しかも、漏れているものが多い。そればかりか、結論があまりにも断定的である。例えば、近代学者の中には「亳州は安徽の北西に位置しており、工商としても有名ではないから、かまわない」と言う人もいるが⁽³⁰⁾、これは関連記録を参照することなく下した結論である。実は、亳州は安徽と河南の境に位置し、中原から江淮行きの交通の要路である。明清時代には商業が繁栄し、康熙時人紐琇が「亳州が揚州と河南の水陸の要地で、建物が高くて、大きな船がいっぱい通している」⁽³¹⁾と記している。しかも、光緒

時『亳州志』巻四『營建志・寺観』には福建会館など7ヶ所の地域商幫会館が載せられているが、これも過誤が多い証拠になる。その上、該書は会館の再建年代を建設時代として記録しており、正確ではない。例えば、同治時『鉛山県志』における会館の建設年代が、該書ではすべて建設年代として記されていたりする。

現代においても、地域会館を論じる時には、そのほとんどが先人の言葉を引用するばかりで、新しい成果を生み出していない。例えば、馮爾康、常建華が1990年に出版した『清人社会生活』において、清代会館は「蘇州には四十ヶ所あって、公所が百二十二ヶ所ある。南京には二十ヶ所があって、上海には十余ヶ所ある。漢口、広州は上海と同じ位である。呉江縣盛沢鎮には徽寧会館と任城会館がある」⁽³²⁾と記している。2003年に出版された余新忠の『清代江南の瘟疫と社会』でもまた「統計によれば、蘇州には会館40ヶ所があって、南京、上海には20ヶ所近ある。盛沢鎮にも徽寧と任城会館ある⁽³³⁾、」と引用しているが、実は、前世紀九十年代の研究によると、上述の各地の会館は記録されている以上に多いことが判明しているのである。会館の数量についてはいまだ系統的な検討が必要である。

総体的に言えば、大正初年に日本東亜同文が編集した『支那省別前志』こそが、記載している商業会館の数量が最も多く、全般的な研究となっている。

そこで以下では、関連資料を参考にして、省別に各地の会館の数量を検討したい。何炳棣などの前人の研究を基礎にしながら、清代における地域商人会館の基本的な相貌をより正確に提示したい。但し、具体的な数量と名称は省略

(30) 何炳棣『中国会館史論』、台北学生書局、1966年、第63ページ。

(31) 紐琇『觚語』巻五「牡丹述」。

(32) 馮爾康、常建華『清人社会生活』、天津人民出版社、1990年、第56ページ。

(33) 余新忠『清代江南の瘟疫与社会』、中国人民大学出版社、2003年、第55-56ページ。

することにする。

二つ以上の省による会館。例えば、湘潭の北五省会館は、北の山西、山東、河南、陝西、甘肅五省の商人が建設した会館である。湖南澧州の津市は繁栄を謳歌していた重要地で、江南会館はそこに位置している。康熙39年(1700)「江南人が津市に移して、館舎を築いて、道光2年から5年まで銀2萬兩を費やして再建した。江南と呼ばれるけれども、「館は上下両江連合して一体になる」というように、実際は上下両江の江蘇、安徽両省も含まれる。その会館はまた三元宮とも呼ばれて、関公、朱熹を祭る。館中事務は朱などの七姓を主として行う⁽³⁴⁾。清末期に日本の長崎、大阪、神戸で建立した三江公所は、江南(江蘇、安徽も含める)、江西と浙江など四省の商人が連合して建立した商幫組織である。山西と陝西も各所で両省連合して「山陝会館」という形の会館を建設して、全国でも有名な会館になっている。

省が異なる二つの県を単位とした会館。例えば、漢口の萍醴公所は光緒年間江西萍郷と湖南両県の商人が萍醴埠頭で建設した会館がある。

一つの省を単位とした会館。こういう会館は実は一般的ではない。ほとんどが同じ省の幾つかの府州の人が連合して建設したものである。例を出せば、全晋会館、安徽会館、広東会館、江西会館などがそうである。

府を単位とした会館。ほとんどの会館は府を地域範囲として建設された。例えば、徽州会館、四明公所、東越会館、三山会館、潮州会館、広州会館などがそうである。元々の府館から分立した会館もある。嘉靖年間、広東潮州の商人が上海で潮州会館を築いたが、会館規則によって、船中の貨物がもしも損失に遭遇したら、近隣の県でも分担する。それ故に、その内部では

さらに、潮陽、恵来幫や澄海、饒平幫や揭陽、晋寧、豊順幫などに分けられた。鴉片戦争前に清政府は鴉片を厳しく取り締まったが、潮恵幫は鴉片を取り扱い、会館内の人に抗議された結果、潮恵幫は潮恵公所を建立した。

二つ以上の府を単位とした会館。例えば、同じ安徽地域に属する徽州と寧国兩府の商幫が連合して徽寧会館を建立した(こういう会館は府館によって建設されるものである)。

一つの県を単位とした会館。この種の会館はそんなに多くないが、例えば南京旌徳会館がそれにあたる。

県以下の地域単位による会館。例えば、洞庭西山商幫の金庭会館がそのタイプである。

実は、会館が包含する地域は一定しない。経営地の遠近、商人の人数、業界別、原籍地の関係などによって結成され、一定せず、常に変動する。小さい幫が連合して大きい幫になることもあるし、大きい幫が分立して小さい幫になる場合もある。会館の組み合わせの特徴について、ある清人がこう述べている。「近いところにいるなら、同じ地域の人が連合する。離れているところに行ったら、同じ省の人が連合する。関係がない場合は言語や趣味など近いものたちが連合する」⁽³⁵⁾。だから、会館の大小に関係なく、地域の基本特徴を保持している。

地域という角度から見れば、会館の数は各地の商人の経営実力や活動範囲とほとんど一致し、徽商、寧紹商人、山陝商人、広東商人、福建商人、江西商人などの会館が最も多い。

地域性を考えれば、会館は事実上、幫と同一概念であって、会館すなわち幫である。

道光年間葉調元の『漢口竹枝詞』に、「工商幫が日々に変わって、八行に分けられる……一つの鎮の商人は各省に行ったり来たりして、各幫

(34) 朱剥珩『小万卷齋文稿』卷一八「津市重修江南会館碑記」。

(35) 董似谷『江南会館義園征久録』序。光緒刻本。

会館が激しく競争する」とある。八行というのは行業幫のことで、各幫会館とは地域幫のことである。この『漢口竹枝詞』の定義は、それ以降の『漢口小志』における商幫が各自会館や公所を持っていたという事実と符合している。道光29年、上海の紹興商幫は浙紹公所を結成して、その目的は「一方郷誼を深めて、一方は同幫を結ぶ」と言われるが、直接には会館を幫の組織として認定することになった。

民国4年の『漢口小志・商業志』には光緒末年の日本駐漢口領事の言い方に沿って、幫について「いわゆる幫とは同郷の商人が団体を結成して、地名を名前とするものである。漢口で有名なのは四川幫、雲貴幫、陝西幫、山西幫、河南幫、漢幫、湖北幫、湖南幫、江西福建幫、広幫、寧波幫などである。これらの商幫は唯一の商業機関で、各自の会館や公所を持っている」と説明している。同書は萬寿宮を紹介するとき、「江西幫会館」と呼び、直接に幫と会館を同一物だと認めている。幫は同郷の商人が結成して郷名を名のる団体、即ち会館である。幫は会館である。ただし、幫は概念的で、会館は実在する建物であるという違いがあるが、その範囲は一致している。

1928年に完成した『膠澳志』では青島の斎燕会館を「山東、天津各幫の商号組織」と呼び、三江会館を「江蘇、浙江、安徽、江西四幫の商号組織」と、広東会館を「広東幫の商号組織」と呼び、幫と地域会館を完全に同一視している。

民国初年には日本人も会館と幫が同一概念だと主張していた。『中国経済全書』は次のように説明していた。「会館や公所は商幫によって建設され、商幫の機関になる。所謂幫は、同業が連合して結成され、理事何人かを選挙で選び、規則を立てて、商務を管理する。上海寧波商人

は必ず寧波幫に入って、湖南商人は必ず湖南幫に入る。漢口茶業六幫公所というのは、広東、山西、湖南、湖北、江西、河南六省が建立し、漢口で経営する茶商はほとんど同じ幫に入る」⁽³⁶⁾。『支那省別全志』陝西巻でも、「会館は同郷者の団体で、いわゆる幫はその商業団体である。会館が独立して存在すると言うなら、各幫は商務会に属する。この三者の関係はといえば、同郷者が集まって会館を設立して、その同業者が商業利益を増やすためにまた特別に幫を結成する。幫は会館の一組織だけではなく、各幫は商業上、商務会に属する。」と記している。漢中府の「商務分会として、洋行、山西票行、沙市票行、山西幫、陝西幫、懷幫、舵幫、川幫、洋藥、茶幫、布幫、江西幫、脚店、黄幫、回幫、錢行、紙片、布行、估衣、山貨、皮貨、京貨など23個の商幫がある。各幫が同業者の団体になって、利益の保護に努める。諸幫が集まって、商務会を結成して当地の商業を検討する。だからこそ、商務会は商幫の総幫である。」とある。該書は陝西漢中府の商業機関を紹介するに際して、6ヶ所の会館を持っていて、その下には7個の幫があると書いている。しかもそれは陝西会館（陝西幫）、山西会館（山西票行、山西幫）、江西会館（江西幫）、福建会館（福建幫）河南会館（懷幫）、兩湖会館（沙市票行）だとしている。『支那省別全志』山東省巻にも「幫は会館や公所の全体に対する総称で、会館がないと幫にはならないし、幫がないと会館や公所にもならない。例えば、広幫といえば、広東公所に参加する広東商人達の全体を指す。また、雲三江幫といえば、江西安徽蘇州浙江会館に参加する四省の商人のことである。雲斎燕幫というのは、山東、直隸兩省の商人全体を指す。

『支那省別全志』貴州省巻では貴州の会館や

(36) 「中国経済全書・会館及公所」、彭澤益主編『中国工商行会史料集』、中華書局、1995年、第91-92

ページ。

公所を紹介するに際して、「湖南、湖北、四川、江西商人達が貴州各地で郷土団体機関会館を設立して、同郷の人の誼や利益を増やし、公所とともに商業機関になる。それ以降、各地で商会を設立しつつ、会館の事務もだんだん商会に移って、商業機関として会館の機能も薄くなった」と記している。『支那省別全志』江蘇省巻には上海の21ヶ所の地域商幫を紹介した後、各幫商人が郷土団体機関会館を設立して、同郷の情誼を深め、更には同業者の機関公所を設立して、商業上の規則を制定し、トラブルを解決し、商業利益を保護する、としている。商会制度が完備するにつれて、従来は会館や公所によって行った事務も商会に移った。会館や公所の商界における影響力も弱くなったとしている。これらの説明や例などによって分かるのは、幫と会館とが同一概念で、会館の某業種をすなわち地域商幫と認めても構わないということになる。我々が言う明清商幫とは、実はこういう角度から見たものである。

各地の商人は人数や経営地の遠近や影響力の大きさなどによって、活動範囲の異なる会館を設立した。会館には大小があり、幫は会館の範囲によって変わり、大きさもちがう。幫は不動ではない。

同時に、地域的な会館のほかに、業界的な会館もあるので、同一会館であっても、異なる幫に属する可能性もある。業界性を考えると、会館と幫はまた区別される。例えば、光緒31年の『上海縣為南貨業創建公所告示文』には、「上海各行、大は会館を建設し、小は公所を建設したが、いづれも同業者が集合して商務を営むためである」⁽³⁷⁾と記されている。そこでの会館とは実は地域商幫のことで、公所とは実は地域商幫の中の各業種担当のことである。例えば、上

海咸豐、同治年間に成立した婺源星江茶業公所は徽寧幫に属す徽寧茶業幫である。

清後期の地方文献や清末民初における日本人の幫や商幫に対する説明には、実は上述の二つの状況が含まれている。だからこそ、筆者としては、会館を地域商幫の組織と認めているのである。

会館に対する研究はほとんどその機能や性質の追及に重点を置いている。その成果は顕著だが、従来は主にその性質を検討してきたのに対して、最近の重要な成果、例えば王日根の『郷土之鏈 明清会館與社会変遷』（天津人民出版社、1996年）は主にその社会効能に偏っている。これらの研究や論議は必須のもので、学術価値も大きいけれども、会館は商人を主とした客籍人の社会組織で、経営が第一の要務なので、その経済機能についての研究も必要不可欠である。

会館の創建者や記録者は我々にたくさんの関連文章を残してくれている。

蔡世遠は蘇州の漳州会館の設立について、「神様を祭ることによって人間の誼を深める。非常に重要な役割を果たしている」⁽³⁸⁾とコメントした。前述した上海の紹興商幫は浙紹公所の効能について次のように説明している。それは「一方で同郷の誼を絡み、一方で同郷を助け合う」ことである。「同郷の誼を絡む」というのは、同郷の誼を重視して、同郷の人の一体感を深めることであって、所謂社会機能である。「同郷を助けあう」というのは、同じ地域から来た商人が一致団結して、内部で協調し、外部と戦い、発展を図ることであって、社会機能と経済機能を兼ねている。余正健は蘇州の三山会館について、「神様を祭ったり観光のためではなく、同郷の誼を絡み、礼讓を凝らす」⁽³⁹⁾といていた。蘭溪人戴曦は蘇州が金華会館を創建する目

(37) 宣統『青益堂征信錄』、彭澤益主編『中国工商行会史料集』、第818ページ。

(38) 蔡世遠「漳州天后宮記」、乾隆『吳県志』巻一〇

六「芸文」。

(39) 余正健「三山会館天后宮記」、乾隆『吳県志』巻一〇六「芸文」。

的を次のように言っていた。

雖蘇之與婺、同處大江以南、而地分吳越、未免異鄉風土之思、故及羈者、每喜鄉人戾止、聿來者、惟望同里為歸、亦情所不能已也……為想春風秋月、同鄉偕來于斯館也、聯鄉語、敘旧情、暢然藹然、不独逆旅之况賴以消釋、抑且相任相恤、脫近市之習、敦本里之淳、本来面目、他鄉無間、何樂如之⁽⁴⁰⁾。

要するに、蘇州と同じ長江以南に位置しているけれども、吳、越の区別はやはり存在していて、風習の相違もあるから、故郷を離れた人が同郷の人との繋がりを大切にすることも当然のことであり、同郷の人がこの会館に集まって、故郷の言葉で喋ったり、誼を語り合ったりして、故郷を離れている悲しみを解消できるだけではなく、お互いに助け合って、現況から脱出して、故郷の風習に親しみ、故郷にいる時と違うところがない。これに勝る楽しみはないという。同趣旨のことが史茂の『新修陝西会館記』にもみられる。

余惟会館之設、所以聯鄉情、敦信義也。吾鄉幅員之広、幾半天下、微論秦隴以西、判若兩省、即河渭之間、材墟鱗櫛、平時有不相浹洽者。一旦相遇于旅邸、鄉音方語、一時藹然而入於耳、嗜好性情、不約而同于心。加以歲時伏臘、臨之以神明、重之以香火、樽酒簋哺、歡呼把臂、異鄉骨肉、所極不忘耳⁽⁴¹⁾。

このほか、蘇州の興安会館、汀州会館、潮州会館、江西会館、浙寧会館、上海の泉漳会館、乍浦の咸寧会館（通称炭会館）などの碑文にも同様の趣旨が刻まれている。乾隆三十一年（1766）、行日昌は『山陝会館重修戲台建立看樓碑記』において、「大きな都市や商人たちの集まるところでは、会館を建設して、宴会を行った

り、集まったりする。旅中に同郷人と出会って、その喜びは倍になる」⁽⁴²⁾と述べている。

以上をまとめてみると、各地の会館や公所の創健者や後継者が繰り返して強調したのは、会館や公所の目的が同郷の誼を深め、神様を祭るという点であった。これは地域会館で最も一般的な活動内容で、最も理解しやすい創建動機で、最も基本的な社会機能でもある。客籍人が異郷で何かをしたいなら、同郷を基盤に拡大した宗族や姻戚関係が一番頼りになる。この力を利用して団結して拡大したいなら、同郷の誼を語り合ったり、神様を祭ったりする形式しかない。会館という建物自身も同郷の誼のシンボルである。お祝いする時、間柄の親疎や営業の異同とは関係なく、同じ言葉で話したり、同じものを食べたり、郷土の神様を祭ったり、地方の劇を演じたりして、親しむ雰囲気は人々の心に沁みいる。家族への思いや郷愁、望郷の苦しみなどすべてが慰められる。便りを交し合ったり、助け合ったりするのは旅人に同郷の大切さを感じさせる。会館は客籍人の絆となり、会館によって同郷人が異郷で小さな社会を組むことができた。

同郷の誼を深めることは神様を祭ることと繋がっている。各地の商幫は各自の神様を持っている。福建、広東などの航海を主とする商幫及び他の沿海商幫は、航海を加護する天妃を信仰する。故に、天妃宮はしばしば商幫会館の所在地となり、これが記されている資料は、数多く残存する「天妃宮記」である。

徽商、寧国商人、山陝商人、江浙商人山東東齋商人などは忠義、正義、強力の代表である関羽関老爺を崇拝する。山東濟寧商、江淮商は宋末期に節に殉じて、河運を加護する諸生謝緒を

(40) 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、三聯書店、1959年、第366-367ページ

(41) 「新修陝西会館記」、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、第375-376ページ。

(42) 当該碑文は聊城大学の王雲教授が提供したもので、竟放主編『山陝会館』、第57ページに収録されている。

金龍四大王と崇拜して、各地の大王寺がほとんどこれらの商幫によって建設された。江西商幫は旌陽令主許逊を許真君として崇拜して、旌陽会館と命名している会館もある。これらの神化された忠義、強力化身は歴代の流伝によって、一定の地域やある業種を加護する功德神になって、郷土神の範囲を超えた。これらの神様を祭ることによって、平安吉利を祈るだけではなく、各地の商幫の特有の象徴を樹立するに至った。これらの神様を祭る時、まるで各地で様々な神様を祭るように、「多くの会館が一神を祭ることに満足しない」⁽⁴³⁾。主神を祭ると同時に、一人あるいは複数の郷土神あるいは故郷の先賢をも祭る。徽州、寧国商人が呉江盛沢鎮で設立した徽寧会館では、本殿で関羽、東では忠烈王、西では東平王、殿東行宮では朱文公朱熹を祭る。蘇州の潮州会館では最初に天後閣を建設して、後に観音閣を増建して、観音閣には昌黎祠（潮州曹史に勤めた韓愈を祭る）を建設している。光緒8年に建設された蘇州の両広会館は独特の特徴を持っている。真ん中に3間の母屋があって、「故郷を管理する人を祭る」。明代は応天巡府広東人海瑞で、清代は江蘇巡府広西人陳宏謀である。蘇州の錢江会館には、外では関帝、内では昌を祭る。蘇州の嘉応会館では関帝のそばに四尊を祭り、内樓に南華六祖を祭る。蘇州の江西会館では主神許真君、後殿に天後を祭る。一番特別なのは、上海の建汀会館で、そこでは中で天妃を祭り、「そばに土地神や先賢をまつる」⁽⁴⁴⁾。上海祝其公所では、関帝も天後も祭る。上海の潮惠会館では、前堂に天妃を祭り、後堂に関帝を祭り、左右に財神、双忠を祭る。上海の商船会館を設立した時には、天後だけを祭ったけれども、後に北庁に福山太尉諸

大神を祭り、南庁に山驃騎將軍大神を祭るようになった。徽商は浙江烏程県眺谷舖では朱熹を祭る朱文正祠を建設して、新安郷祠とも言う。寧紹商人は浙江帰安県済川舖に寧紹三賢祠を持っていて、寧紹郷祠とも言う。これで、明清会館の神霊崇拜は単一神から衆神へと発展した。関聖天妃、財神土地神、先賢名官などのすべてが対象になっている。

会館は持久性の感化力を持たなくてはならない。異郷にいる業種の異なる同郷人に会館に対する求心力を持たせるために、同郷の誼を深め、神様を祭るだけでは足りない。多くの会館は社会救済を重要な役割としている。会館に参加した商人は営業額に比例する金額を寄付したり、不定期に寄付金を出したりして、共同出資で会館の資金を捻出する。雍正年間、蘇州にいた江西商人が万寿宮を増建した時には、「白麻每担四分を税として抽出する」。これによって、一年に800両が集まった⁽⁴⁵⁾。乾隆末年に会館を建設する時にも、同郷の商人がお金を寄付した。乾隆年間、杭州絲綢商人が蘇州で会館を建設する際の資金を寄せ集める方法は、「貨物高によって税金を決める」⁽⁴⁶⁾。乾隆中期、蘇州の山西会館は票行が寄付金を出しあって建設された。乾隆35年、蘇州の徽州商人が徽郡会館を建設する時、油、棗、紙三幫が寄付金を出した。杭州の徽州木業公所は「木幫でトラブルが起こったら、理事会によって解決して、特別扱いなどしてはいけない」と規則を作った。木業公所の共同支出は同業者が営業額によって負担した。規定によれば、山客沙糧捐が百元に3錢7分5厘を寄付して、治安維持のパートロールに使う木捕捐は百元に1錢を寄付して、各木所によって集め、納める。光緒34年（1908）、八ヶ所の

(43) 王日根『郷土之鏈 明清会館與社会変遷』、天津人民出版社、1996年、第282ページ。

(44) 「重修建汀会館碑」、『上海碑刻資料選輯』、第278ページ。

(45) 「江西会館万寿宮記」、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、第359ページ。

(46) 「吳閶錢江会館碑記」、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、第24ページ。

木行によって沙糧捐や木捕捐を収める山客商号は225家に達した⁽⁴⁷⁾。道光年間、蘇州の紹興商人の燭業東越会館は、「各業種が一年ごとに柏油の販売量をチェックしてから、担ごとに銀二分に決めて、月ごとに会館に差し出す」⁽⁴⁸⁾。

経営額に比例して寄付額が定められる習慣もあった。

同治年間、浙南粗紙簍業の商人が蘇州で浙南公所を設立して、各商号が7千文を寄付して、しかも年ごとに貨物量によって寄付金を定めて運営費として使う⁽⁴⁹⁾。清代杭州絹糸商人が蘇州で設立した杭線会館は、月捐に加えて、貨物量に比例して寄付金を徴収する。同治年間、上海の潮州府の潮惠幫商人が会館を再建する時、主な経営品糖、煙草、鴉片などに対して寄付金を徴収することによって成功した。光緒年間、蘇州の東越会館を拡張する時、同人の寄付金を受け取ったけれども、まだ足りず、館屋を質に入れたがそれでもなお足りず、柏油、白蠟から寄付金を徴収して、ようやくできた。上海の建汀会館が道光中期に設立された時にも、各業種から寄付金を集めることに決めた。太平天国以降、上海に移転する人が急増したが、経費は同郷各業種の月捐及び紙、棕などの捐だけでは可能な慈善事業に限られる。そこで同人が月捐を収め、龍岡会の寄付金を徴収して、慈善事業を拡大することに決めた。会館に余裕があれば、建物や不動産を購入して利子を取る。これらの寄付金や利子などは、会館などの建物の修理以外に、同一会館に属する貧乏人や失業者や病人を救済して、同郷の人の生養死葬に使う。亡くなった同郷のために経を読み、済度する会館もある。この面に関しては、寧波商人が最も目立

つ。上海の四明公所では、木業は長興会、肉業は誠仁堂、竹業は同新会、内河小船業は永安会、馬車ペンキ業は同議勝会、鉄鋼機器業は永生会があった。会館にはたいい葬儀館や、塚があって、故郷へ帰れない人のお葬式をやったり棺桶を置いたりする。この面については、徽州商人が一番目立つ⁽⁵⁰⁾。

日本での三江公所は、統轄する地域が非常に広くて、しかも外国に位置するので、棺桶を国に運ぶ時、各地商幫が国内の会館と連絡を取って、後者に引き継いで受け取る。光緒9年、神(戸)(大)阪三江公所は上海の徽寧会館に商人の棺桶を引き継ぐ要求を出したことがある。三江公所首事が公文で、

窃為奉憲諭運回旅梓以安旅魂而正首邱事。窃照本幫同人、或商或工、在神病故、歷厝義庄、誠恐年久暴露、茲特釀資、附搭英商輪船運回上海。除稟叩理事府照会租界会審分府、除令該柩原籍会館公所轉行運歸原籍以安旅魂外、合行給發執照、務祈貴会館公所按照后開各柩籍貫、姓名驗收。至執照者⁽⁵¹⁾。

本幫同胞の商人や工人が病気などで亡くなれば、長年にわたって公所の葬儀館に置くことになったりもして、死骸が損壊する恐れがある。そこでこのたび、資金を集めて、英国商船に上海まで運んでもらう。理事府によって租界会審分府に覚書を提出して、棺の所属する原籍の会館や公所が原籍へ運んで、鑑札を発行する。貴会館が覚書に応じて、原籍や名前通り受け取ってほしい、という。上海租界会審官は清政府の神戸駐在領事の覚書を受けた後、上海の徽寧会館に受け取るように命令を出した。各地域の商人は、会館や会館による慈善活動などで、精密

(47) 『徽商木業公所徵信錄』。宣統刊本。

(48) 「蘇州府為燭業東越会館規定各店捐款碑」、『江蘇省明清以來碑刻資料選集』、第217ページ。

(49) 「捐資重建浙南公所碑記」、『江蘇省明清以來碑刻資料選集』、第75ページ。

(50) 拙稿「清代徽州商幫的慈善設施——以江南為中心」、『中国史研究』1999年第4期を参照。

(51) 「徽寧思恭堂徵信錄」、王振忠『徽州社会文化史探微』、第569ページより引用。

な商業貿易ネットワークを構築するに至った。

会館の慈善施設は会館が建設された後に設立する場合もあったが、会館を創立する以前に買入れたのもかなりある。会館がなくても、そういう施設を保有している場所もたくさんある。義学を持っている会館もあった。その目的は当地域の貧乏人の子弟に勉強するチャンスを与えることである。各地域の商幫がこうした慈善活動を行うのは、同籍内の求心力と対外的な競争力を高めることである。各地域の商幫の実力は会館建築や善行施設と概ね比例している。会館は慈善活動を実施する社会組織でもある。

同郷の誼を深めること、神様を祭ること及び慈善活動を行うことは、地域会館のすべてが備える活動内容であって、創建者が公的に宣言を繰り返した目的でもある。では、会館はどういうふうに商務的な経済機能を実現したのか。

『支那省別全志』浙江省巻は杭州の会館や公所を紹介した際に、会館は同郷の団結集団で、商業活動を主催せず、大施設を持たず、主な活動は祭神や慈善や親和などであるとしている。しかしながら、商業上の郷土人の利害に関わる事件が起こったら、その団結は非常に厳密で、協力して活動を行ったから、商業団体とも言える。公所はとりわけ同業組合の性質を持っている。例えば、規約に違反したら、公所から除名されて、貿易などに関する制裁を受けるので、商業上の重要な機関であり、現代の学者、例えば王日根らは社会機能を強調している。

実は、上述の会館の活動は社会的でもあり、経済的でもある。最終的な目的は、各商幫自身の実力を維持、発展させて、日々激しさを増す商業競争で負けないことである。

康熙後期、金都御史張徳桂が北京の仙城会館に関して、「所謂会館は同郷の人が貿易で協力

しあい、神を祭るところである」と解釈した。しかも、北京での経営者、例えば、絲綢を販売する人、洋貨を販売する人、果物を販売する人、香料を販売する人は皆「資金を銀行に貯金しなければならぬ」ので、会館を必要とするようになって「十数年来、会館が流行るようになっていた」と書いている。

張氏はまた李兆図と馬時伯という二人の商人の意見を踏まえて、義利関係について論議した。「この会館という組織は同一の利益を持っているので、仲間の誼がいい。仲がいいから、利益を侵害する人を退けて、搾取する人を排除できて、利益を得たければ利益をもらえ、義を守りたければ義を守る」⁽⁵²⁾と。張徳桂と二人の広州商人の意見によれば、会館は、外地で経営する商人が貨物を銀行に預けて、損害を受けたり行動が制限されたりすることを防ぐために、形式上は義の基に最大の経営利益を求めるために設立したものである。同様の事例がほかにもある。乾隆13年(1748)、蘇州にいる胶東商人も同じ意見を持っていた。商人たちが「お金をたくさん儲けても、必ずしも同じ経営方法の結果とはいえない。性質の悪い人は悪いやり方ばかりをして、他の商人の利益を妨害して、仲の誼とかが全くない。会館の設立は義にも大きな意義を持っている」⁽⁵³⁾。乾隆37年(1772)、蘇州の『呉間錢江会館碑記』には首都と地方都市会館の性質を比べて、地方会館の設立原因をこのように説明している。「ほかの都市会館はそうではない。通商や販売の統計を作成して、損益を計算して、幾つかの規則を定め、その中で問題が一つでもあったら、すべて崩れる」。しかも、会館とは「貨物を保存し、商人たちが貿易をするところである」と書いている。何年か後に、錢江会館が官吏に借金を繰り返されて、商

(52) 『明清以来北京工商会館碑刻選編』、第15-16ページ。

(53) 「東齊会館碑記」、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、第369ページ。

人たちは不満で、法廷に告訴したら、呉県知事が「会館は商人が貿易をするところである……商人たちが寄付金を出して会館を設立して、寄り合うことは有利で貿易にもいい。貨物を会館に保存したり商人が泊まったりして、本当に経営や貿易に欠かせないところである」⁽⁵⁴⁾。乾隆49年(1784)、馬登雲は、蘇州の潮州会館が設立された後、「我が同郷の人が蘇州に行く時、或いは貿易をやる時、全部会館に泊まる」と書いている⁽⁵⁵⁾。道光16年(1836)、蘇州の金華商人は会館を再建して「以降、我が郷の人が通商するときには会館に泊まればいい」⁽⁵⁶⁾と語った。道光18年(1838)、北京の『顔料業会館碑記』に「各業種が会館を持っていて、価格を定める」⁽⁵⁷⁾と記し、商業会館の機能を、価格を定めることであると説明した。同治時、上海の『創建潮惠会館碑記』には、会館が落成したら「春秋集合して、経営の方法を相談する。商人達が会館に集まって、神様を祭ったり仲の誼を深めたりしてする」⁽⁵⁸⁾とある。これは会館が、商業情報を交流したり経営策略を論議したりする機能を持っている証拠である。当時の人が書いた碑文は会館の機能を明確に説明して、会館は経営方法を磨く場所であるとしている。客籍商人が遠いところまで行くのは、同郷の誼を深めるためではなく、利益のためである。会館のような公共場所は、集団の力を利用したり、経営方法を磨いたり、経営方針を検討したり、商業情報を交流したり、共同行動を取ったりするのに格好の場所である。会館、特に公所と呼ばれる地域会館は、貨物を保存する場所である。例えば、光緒年間漢口の萍醴公所は、「萍醴商人を泊めたり商船を停泊させたりする」⁽⁵⁹⁾。会館が会員

に資金を提供する場合もある。徽商の漢口での会館は資金が非常に豊かで、徽商に経営資金を提供することが会館の大きな役割である。例えば、もしも徽商が経営に挫折して、業種を変えたいなら、会館は資金面で助け、その回復を目指す⁽⁶⁰⁾。民国初年の日本人は、会館の主な事業が会員間の信用維持、資金の融通、同郷の吉凶禍福を祝ったり解決したりすることだと言っていた。

会館は地域商人が異郷で商人の自己管理、発展を管理する社会組織であるので、地方政府が治安管理、特に外来人口を管理するのに重要な補助機関になった。道光年間には、江南で会館を利用して都市人口を管理すべきだとする意見が提出されている。

省垣五方雜処、易成朋党、易起讐端。此中查訪難周、最難安放。竊意各省有各省会館、各行有各行会館、各歸各幫、尤易彈压。宜于会館中、択賢董数人、専司勸導、每逢月朔日、各会館宣講館約……三次不到、即擯斥、或資遣回籍、如此……雖五方雜処、亦不足患也⁽⁶¹⁾。

こうした構想は実施するのは恐らく難しいし、実際に実現できたかどうか分からないが、会館が地方政府が治安を強化するための依頼対象で有力な手段であったことは、確かである。乾隆49年(1784)、蘇州の潮州会館の碑記には姚という苗字の「客長」のサインがあり、この「客長」は恐らく外地商人の代表で、客籍商人を管理統御する人である。新安質屋商人は、質屋店舗内部では「もし不肖者がいたら、会館が排除して、悪者が混入しないようにして、経営規模を発展する」⁽⁶²⁾と主張する。会館は内部の自己管理や規律によって所在地の社会治安に力を

(54) 「呉県永禁官吏占用錢江会館碑」、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、第25ページ。

(55) 「潮州会館記後序」、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、第344ページ。

(56) 「重修金華会館記」、『江蘇省明清以来碑刻資料選集』、第367ページ。

(57) 『明清以来北京工商会館碑刻選編』、第7ページ。

(58) 『上海碑刻資料選輯』、第326ページ。

(59) 民国『醴陵県志』「建置志 公所」。

(60) 『徽商研究』安徽人民出版社、1995年版、第131ページ。

(61) 「宣講郷約新定規条」、余治『得一録』卷一四。

尽くす。清前期、重慶府巴県衛で、もし外地商人や客籍人に関する事件が生じれば、ほとんど「八省客長」に処理してもらうか、或いは先ず「八省客長」の意見を聞く。トラブルや刑事事件があったら、一般的には「八省客長」を容疑者の保証人に命じる。陶磁業で最も有名な景德镇では、陶磁を焼く商人と工匠が非常に多くて、都昌幫、徽州幫と雜幫に分けて、三幫が各自「リーダーを選出して、資金を集めたり検査したり弾圧したりする」⁽⁶³⁾。政府は各幫のリーダーに頼って地方治安を強化した。

会館は社会管理の有効な力であって、商人が連絡を取り合う組織であるから、官方勢力を含めた各種の社会勢力に対応する組織になる。各地会館の碑記によれば、商人は個人であれ、集団であれ、異郷で地方勢力に挑まれたり利益が侵害されたりする時には、いつも会館に交渉してもらう。同治10年(1871)、広西賀県官吏張聯桂がこう言っていた。地方勢力と客籍商人の間に、「小さなことでもトラブルが起こって、客籍商人はいじめられ、事業を容易にできない」から「時々会館に集まって、資金を集めたり告訴を相談したりする」⁽⁶⁴⁾。地域商人は会館を立てることによって地方勢力と対抗する。『清国事情』(日本外務省局編纂)第二集では、会館の性質や機能を論じる際に、次のように言っている。会館は商業界の大きな機関で、会館を利用して官吏の抑圧と対抗し、また助け合って、共同利益を保全する。もし告訴事件があったら、会館の仲裁や和解を受けるといったように、まるで商事裁判所のようなものである。しかも、地方から新しく来た人の高級ホテルとして機能したり、会館によっては安全な商業貿易を行う。ベテランの外国人商人は、大きな商業貿易はすべ

て会館によって行われるとまで言っている。民国初年、日本駐華領事はこう言っていた。「政府や官吏の保護が得られないので、商人は各自で自治する風習になった。同郷者や同業者は団結して、会館や公所を設立して、各自の名誉や利益を保全して、助け合って、お互いに救済する」⁽⁶⁷⁾。日本大正4年(民国4年、1915年)、織田萬が会館公所の性質を説明するに際して、「いわゆる会館公所は、商務の秩序を維持し、その信誉を保つ。共同利益を保護して、治安を維持した」と言った。

要するに、会館の機能は多面的で、一面だけに絞って検討してはならない。実は、既に清代に、会館の多方面の機能について説明がなされている。嘉、道年間、徽州人朱剥琚はその著書『津市重修江南会館碑記』で会館の機能について、「同郷の誼を深め、物価を調整し、トラブルを解決し、良い策を定める」と説明した。その言葉は簡単であるけれども、会館の同郷の誼を深め、商務を計画し、社会治安を維持するなどの機能を全般的に言い表している。光緒27年(1901)吳大澂は上海『潮惠会館二次遷建記碑』に、会館の機能について全般的に説明した。会館之建、非第春秋伏臘、為旅人聯樽酒之歡、叙敬梓恭桑之誼、相与樂其樂也;亦以懋遷貨居、受塵列肆、云合星聚、群萃一方、詎免睚眦、致生報復、非頼耆旧、曷由排解?重以時勢交迫、津梁多故、橫微生斂、吹毛索癥、隱倚神叢、動成瘡疣。雖与全局无預、而偶遭株累、皇皇若有大害。踵乎厥後、既同井邑、宜援陷阱、凡此皆當憂其所憂者也。縱他族好行其德者、亦能代為捍衛、而終不若出於会館、事从公論、衆有同心、臨以明神、盟之息壤、俾消釁隙、用濟艱難。保全実多、關係殊重。推之拯乏給貧、散財發粟、尋

(62) 『典業須知・敦品』、抄本。

(63) 劉坤一『劉坤一遺集』公牘卷之二「嚴禁棍徒聚衆滋事示」、中華書局、1959年。

(64) 張聯桂『問心齋治雜錄』卷下「勸士客破除陳見

彼此和睦示」。光緒重刊本。

(67) 日本外務省通商局『在天津總領事館管轄区域内事情』、1924年、第52ページ。

常善舉、均可余力極之、无煩類数。此会館之建、所不容緩也⁽⁶⁸⁾。

会館は同郷の誼を深め、同郷や同業者が助け合う以外に、商務を計画し、トラブルを解決する。経済形勢変遷の激しい清代後期に、同郷同人の利益を保護し、関係部門、特に税務部門と交渉する機能を持っているし、会館が事務を処理する際には非常に公平で、神明にも誓っており、ほとんどのトラブルは萌芽状態で解決できて、同郷を保全する有効な郷邦組織である。会館が商務を計画する機能は、次第に強くなっている。煎じ詰めれば、会館は経済の周期情報を把握し、商務を相談する組織である。神様を供養することも、慈善事業も、商人にとって、ほとんど商業活動の基礎になることであって、経営の拡大に有利で、これらの活動自体も商人活動の必要部分だと言っても過言ではない。だから、商業発展の角度から見れば、会館は客籍商人と連絡して、団結を強めて、自立を保護して、発展を図って、実力を増強して、商務を開拓する郷邦組織である。明代中期以降、雨後の筍のように出現している商幫は、会館が発展して壮大になったものである。

4 おわりに

会館は神様を供養する公共建物であり、同郷の誼を深める集合場所であり、慈善活動を行う社会組織であり、商務を計画する地域団体であり、地方政府が治安を強化する補助力であり、商人集団が各種の外来トラブルと対抗できる組織でもある。こうした会館は業界の組織ではなく、特定地域の各業種全体における客籍人の地域組織で、内部に対しては相互制限、排斥などではなく、郷邦精神の呼びかけに応じて、「方法を交流して、誼を深める」組織である。お互い

に助け合ったり、保護したりして、同郷の経営活動を制限することなく、人数の増加や実力の発展を最も優先する。外部に対しては、独占ではなく、発展を励まし、競争を唱えて、経営方法を重視して、他の地域商邦と競争を展開する。このような会館は、商工業、特に商品経済発展が一定のレベルに達した結果であって、各地の商人が競争を展開した結果でもある。その形成や発展によって商品経済をさらに促進した。歴史的に、商品経済が発展したところには、商人会館が多くて、商品経済と会館との発展は一致する。これらの会館を区別せずに、そのすべてが対内における発展制限、対外における競争排斥の封建的組織だったと言うのは、理論的にも史実に照らしても間違っている。一部の論者の商人会館についての「行会精神の主な方面、例えば市場を独占し、値段を統一し、度量衡を統一し、商品規格を統一し、非本行会の商人をコントロールしたり排斥する」⁽⁶⁹⁾といった見解は、実は個別行業性公所だけに沿った議論で、論議すべき商人会館の全般的な性質を証明できないのである。

会館や公所の区別と繋がりについては、日本大正4年（民国4年、1915年）、織田萬が会館公所の性質をこう説明している。「会館、公所というのは、名前が違うけれども、実際はほぼ同じである。その起源を探せば、会館は同郷人の異郷での団体で、同郷の誼を重んじる。公所が同業商人の団体で、経営を重んじる。だから会館は同じところでの同郷人の団体である。団体内部では貧しき者に衣食を提供し、病者に医薬品を提供し、死葬共にして、同郷人間の相互救済を主旨で組んだ組織である。公所は同業商人の組織で、その業種での悪者や弊害を排除し、その名誉を維持し、共同利益を保全することを主旨で組んだ組織である。二者はこんなにはっ

(68) 『上海碑刻資料選輯』、第331ページ。

(69) 汪士信「明清商人会館」、『平準学刊』第三輯下冊。

きり区別されている。同郷の誼を深める団体であって公所と名づけられるものもあるし、経営を維持する団体であって会館と名づけられるものもあるし、両種の性質を持っていて、会館或は公所と名づけられるものもある。実態が分からなければ、その団体の性質を判断できない。初めに同郷人が集まって会館を設立して、誼を深めて、その会館に所属する人が偶然に同じ経営をしているから、その会館で同業者に便宜を提供するものがある。その一方で、同業者が公所を設立して、その公所に所属する商人が偶然に同郷者であるから、その公所で同郷の誼を深める機能を持っているものもある。こうして、その性質は混じりあい、区別できなくなる。会館と公所は、両方とも同郷者や同業者の客籍人の団体で、同郷の誼を含めて経営に便宜を提供するもので、会館や公所などの名前だけで区別することはできない。こういう団体がたとえ同郷の誼を深める目的だけで設立されたとしても、所属する人は全員が商人であるのが普通なのだが、非商人なのに団体を結成しているものもある。例えば北京にある外省の同郷官会館のようなものは珍しい。要するに、会館や公所は商務秩序を保って、名誉を維持して、公共利益、公共治安を推進する機能を持っている。」更に、織田萬が「会館、公所という名前は、泰西人の記録者が用いることが多い。泰西商工会(Guild)と比類する者もあるし、会館が商業会議所(Chamber of Commerce)と似ていて、公所が工匠協会(Trade Union)と似ているという者もある。こういう説は、会館や公所を共に経営団体に位置づけ、更には、商、工二種に分けて位置づける。これは泰西今近の思想で支那慣習における事実を説明するから、こじつけの疑いが大きい」⁽⁷⁰⁾。筆者の考えでは、織田萬は会館や公所の区別と繋がりをはっきり説明したし、西方中

世紀の行会をもって明清時代の会館や公所を説明できないことを鋭く指摘したけれども、他方で、織田萬は会館や公所が大量の跨地域の行業性公所を含めていないし、会館や公所の同一性を強調しすぎで、異なる方面を見落とした。現今の多くの研究も同じく、個々の会館公所の実態に気を配らず、会館公所の同一性を協調しすぎで、その相違性を無視し否認しがちである。

それに対して筆者は次のように考えている。会館は地域性の産物で、たとえ同地域の行業性公所だとしても、地域の範囲内で組んだもので、公所は行業性産物で、同地域商人の範囲での組織の可能性もあるけれども、多くの公所は地域の特徴を持っていないから、その同一性だけを検討するのではなく、その相違性も考えるべきである。あるがままに会館や公所の性質を指摘したいなら、会館や公所を地域性と行業性によって区別したうえで分析し検討することが必要であろう。

(楊珍珍 訳)

(70) 織田萬『清国行政法分論』巻一、1915年。